

cue

京都大学電気関係教室技術情報誌

NO.11

JUNE 2003

[第11号]

.....
卷頭言

葉原耕平

.....
大学の研究・動向

通信システム工学講座・知的通信網分野

エネルギー生成研究部門・粒子エネルギー研究分野

.....
産業界の技術動向

住友電気工業(株) 林 秀樹

研究室紹介

平成14年度修士論文テーマ紹介

学生の声

教室通信

cue：きっかけ、合図、手掛かり、という意味
の他、研究の「究」（きわめる）を意味す
る。さらに KUEE（Kyoto University
Electrical Engineering）に通じる。

cueは京都大学電気教室百周年記念事業
の一環として発行されています。

教室通信

平成15年度が幕を開け、本年度は、かねての計画通り、桂キャンパスへの移転が実施されます。我が電気系教室につきましては、大学院工学研究科の2専攻（電気工学専攻と電子工学専攻）と附属イオン工学実験施設が移転します。日程としては、上記電気系については、8月25日～9月22日の間に移転することでスケジュールが組まれています。例年、8月下旬に行われていた大学院入試は、今年は繰上げて、8月上旬に実施の予定です。なお、大学院情報学研究科の通信情報システム専攻など旧電子通信工学専攻に属する研究室は、平成19年度に桂へ移転する予定であり、今年度後半より4年間ほど、電気系教室は地理的に分離状態になります。これによる、主として学部学生の教育上の問題点と電気系教室としての対応策については、奥村前学科長よりCue9号の教室通信に述べておりますので、参照頂ければ幸いです。また、21世紀COEプログラムとしても採択された研究内容については、拠点リーダーの荒木教授よりCue10号の本欄で紹介した通りであり、鋭意、推進あるのみです。

桂キャンパス移転がらみの詳細については、次号以降、適宜、報告させていただきます。

残りの紙面を頂いて、平成15年度の新学期開始に当たり、学科長として学部学生に行った挨拶の要旨を報告させていただきます。卒業生諸賢のご意見、ご批判を頂ければ光栄に存じます。

「挨拶要旨」：新学期の冒頭にあたり、学生諸君に申し上げたいのは、電気電子工学の専門家としての基礎を築くと同時に、人格を磨く、人間を磨く、倫理観を持つ、と言うことを、各自、心掛けてほしいということです。今、日本の産業界・経済界は概して元気がありませんが、私は、小手先のデフレ対策などいくらやっても線香花火のようなものであると思っています。根本原因は、日本の力、すなわち、日本人の人材としての力が落ちてきたことであると考えているからです。専門家として、ひとりの人格として、しっかりと芯の通った、使命感を持った人がもっと育たなくては、問題は解決しないと思います。そういう人に、諸君にはなってもらわないとこの国は持ちません。まずはこの1年、ぜひ技術力と人格の両面を磨く努力をして下さい。

日本人の人間としての力が落ちてきたとお前はいうが、では、昔は立派だったのか？と皆さんは思うかもしれません。日本が戦争に敗れて58年、骨抜きにされるまでの日本人がどのようなであったか知りたければ、例えば、「わがいのち月明に燃ゆ」と題されたこの本を読んでみて下さい。京都大学における皆さんの先輩であり、私の先輩でもある「林 尹夫(ただお)」という方の日記を彼のお兄さんがまとめられたものです。学業半ばにして、学徒出陣兵として招集され、1945年7月末に戦死されました。彼の三校－京大－海軍時代、年齢にして、満18歳から21歳まで、1940年4月から1943年夏にかけての約3年間の日記です。学問に取り組む心構え、家族、友人への思い・心遣い、この国の未来に何を託して、何を守ろうとして、彼が戦死して行ったか、まともな人間なら襟を正さざるを得ないはずですが。私は、彼が特別な若者であったとは思いません。ほんの60年ほど前の京大生を代表しているのだと思います。この本は、筑摩書房から出版されていますが、最近、書店で見かけないので絶版になっていなければよいと思います。何しろ、出版社が儲かるというような本ではありませんから、出版社の使命感のみが頼りです。このようなものがことごとく失われているのが昨今の日本です。

もう一例をあげますが、1871年11月から2年間をかけ、明治を開いた岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文らが、岩倉使節団として、アメリカ、ヨーロッパを訪問したことは、皆さんもよくご存知だと思います。彼らが、英語を達者に扱えた訳はありませんが、日本人であることの誇り・矜持とその倫理的で立派な立ち居振る舞いにより、当時の欧米の人達から強い尊敬の念を得ています。大久保利通といえば、日本を近代化するための優れた官僚組織を作った人ですが、最近のていたらかな外務省をはじめとする、「国を思わぬ」官僚たちの多さに、さぞやあの世で嘆いていることと思います。

ここには、留学生の方々もおられるでしょう。皆さん方に関係のない話をしているのではありません。

皆さんは、皆さんの国と民族に誇りを持ち、自分は国を代表しているとの意識を持って、日本で学んでおられるはずで、その日本がこのようになっていたらかな状態では、留学している皆さんにも申し訳がないのです。曾野綾子さんのいう「正直さ、勤勉さ、正確さ」という特質を持った、本来の日本人と日本になってこそ皆さんが留学するにたる国になるのです。まずは、京都大学の電気電子工学科に学ぶ皆さんから、そうなってもらいたいとの思いを述べさせて頂いています。

少し固い話になりましたが、京都大学への入学を志した皆さん一人一人の当初目標の達成に向かって、しっかりと勉学に励げみ、電気電子工学の専門家として基礎を築いてほしいと思います。そして、ぜひ人間を磨くことにも努力して下さい。時間を無駄にすることなく、充実した毎日を生き貫いてくださいとお願いして、私の挨拶と致します。「挨拶完」

最近の日本は、いささか籬(たが)が緩んできた、ふやけてきたと言わざるを得ないので、この国の将来を担う学生諸君に激を飛ばしました。自分のことを自分で決めることができなくなっている、今の日本では、もはや受け入れられることが難しい意見かもしれません。また、研究教育の基盤としての大学のあり方も大きく変わろうとしています。国立大学の独立行政法人化が審議されていますが、京都大学の研究・教育について、「中期目標と中期計画」なるものを策定させ、それを文部科学大臣が審査・承認し、進捗状況を評価する、という内容です。実質は、文科省の役人が審査、承認、評価する権限を行使することになりますが、彼らに京都大学の研究・教育の中味の評価などできる訳がありません。結局、申請書、報告書など膨大なる書類の山を作成することが大学人の仕事になるであろうことは火を見るよりも明らかです。というより、構造改革をやるなら、まず整理対象にするべき文科省の権限を、より強化するという本末転倒も甚だしい処置であると言うことです。私は、京都大学の総長、学部長に人事権を持ってもらい、適正なトップダウンの効く組織にすることには大賛成ですが、今回、大学は、「独立」からは益々、程遠い組織になろうとしています。大学こそ、国が不甲斐ない場合は、石原東京都知事よろしく「国を小突き回す」ぐらいのことをやるべきであり、京都大学にはそのような気概が残っていてほしいものと願います。

電気電子工学科長 中村 行宏

編集後記

電気系教室の産業界への情報発信の一環を担う「cue」は、お陰様で本号で第11号の発刊を迎えることができました。ひとえに皆様のご支援の賜物と、厚く感謝申し上げます。大学の組織が開学以来の大きな変革を向かえていることで、さまざまな議論がなされています。工学研究科の電気系専攻の研究室は、既に桂キャンパスへ特殊設備の移転を開始しております。さらには吉田地区の再利用のための計画が検討され、電気系教室を繋ぐものは、物理的な直接の関係から情報を介した間接の関係にならざるを得ないものとなりつつあります。その中で本誌が、多少なりとも電気系教室の構成員の間をつなぎ、研究科、組織間の垣根を越えた連携を促す基点になればと考えています。またその連携が産業界との連携を生むという流れが生まれることは、決して不可能では無いと考えます。電気系教室としては、なお一層の情報発信を自らの手で行っていきたいと考えています。今後も電気系教室への一層のご支援をお願い申し上げます。

(T.H記)

発行日：平成15年6月

編集：電気電子広報委員会

吉田 進、引原 隆士、鈴木 実、
芝内 孝禎、松尾 哲司、山田 啓文、
朝香 卓也

京都大学工学部電気系教室内

E-mail: cue@kuee.kyoto-u.ac.jp

発行：電気電子広報委員会，
洛友会京都大学電気百周年
記念事業実行委員会

印刷・製本：株式会社 田中プリント